

氏名：平野 稔也(青年海外協力隊)

滞在国：タンザニア

職種：理学療法士

タイトル：ザンジバル日記(Habari za Zanzibar)13

友達紹介

「Tukale(トゥカレ):食べに行こー」

病院で活動していると、いつも横の学生が言うてくるフレーズです。

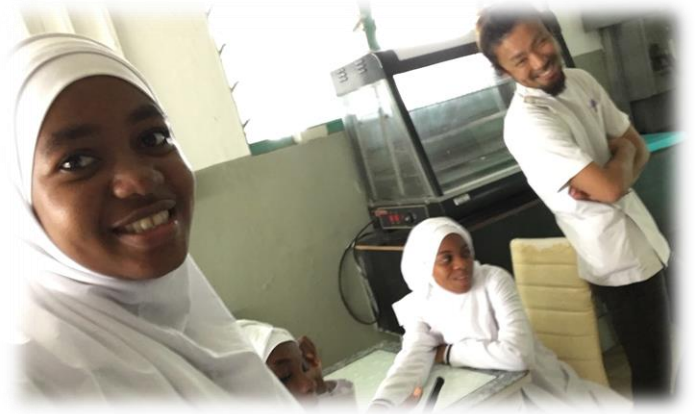
ご飯を一緒に食べれば奢ってもらえると、満面の笑みで誘ってくる子が今回、ご紹介する“友達”

名前は“アイーシャ”

左側で自撮りをしている彼女がその子です。

彼女は理学療法士を目指す学生で、同時に私に色々なザンジバルの文化を教えてください。理学療法に関しては私が指導し、その他困った時や何かあった時は彼女たちによく助けを求めます。学生は素直なので、意外と関係を上手に築くことができるのかもしれませんが。

でも、もう少し真面目に勉強して欲しいと思うところは多々ありますが…



病院活動 「立場が変わったときに」

「Tutakuwepo(トゥタクウェポ):あなたは(ここに)いるでしょう」

「Tunataka(トゥナタカ):私たちはあなたを求めているよ」

最近、こんな言葉をかけてもらいました。もちろん、“何もない”ところでこのような言葉を耳にすることはありません。

私は数年間、理学療法士に従事してきましたが、幸運なことに大病一つすることなく仕事に集中することができました。理学療法士というと、介助量が多い患者さんに対して移乗(移動を介助すること)を行うことも少なくなく、力を必要とする場面が多いです。そのため、腰を持病に抱える先生も多いのもよく耳にします。私は“まだ若いし、身体を気にしているから大丈夫だ”と思っているセラピストの一人だったのですが、タンザニアに来て1年…腰痛をあることをきっかけに発症し、仕事を休まなくてはならない状況が起きてしまいました。

「病は気から」ということわざがありますが、今回病気をして自分の仕事やしたいことができなくなり、不自由な自分がこんなにも身体面だけでなく精神面にも影響を与えてしまうのかと感ずることがありました。心の中では「なんでもできる自分」と、「それを可能にしない身体状況」、そして「異国にいること」により、気持ちのはけ口がうまく得られないといった悪循環が、何か…気持ちの不安定さが身体面にも影響しているようにも感ずるようになりました。

そんなことを感じ、過ごしているある日、私が今まで診ていたある患者さんがその話を小耳に挟んだようで、その時こう言いました。

「Tutakuwepo(トゥタクウェポ):あなたは(ここに)いるでしょう」

「Tunataka(トゥナタカ):私たちはあなたを求めているよ」

とても、短く、簡潔な言葉。しかし、そこから感じる人の優しさ、そして私という“外人、ボランティア”を認めてくれたような気がしました。

感謝の言葉もとても嬉しいですが、“必要としてくれている”と感じられたこの瞬間の言葉は今までの活動ややってきたこと、失敗したことを含めて報われた気持ちにさせてくれました。

いつもは「医療を提供する側が怪我をしてはいけない」、「困っている人、治療を必要としている人、一人でも多くの人に提供できれば」、「自分のことは二の次に、相手を第一に考えてやる」でしたが…いざ、立場が変わると逆に患者さんが私を救ってくれた、そんなことが感じられた瞬間でした。

トゥンバトゥ島 ザンジバル発症の地

相変わらず、南国なザンジバル。4月になるとそんなザンジバルも雨季に入る時期にもなります。さて、ザンジバル周辺には多くの小さい島が存在しています。その中でも大きい島で、しかし、あまり現地人でも訪れることがない島が一つあります。

それが“トゥンバトゥ島”。ちゃんとした船がないため、小型の船で往復し、その現地出身者の紹介がないと入りにくいとされている島です。とても島民間の結び付きが強く、外からの人などをあまり好まないとされています。この島も同様にイスラム教がほとんど占めています。島内の村は2つしかなく、それ以外は森林となっています。

今回は私たちの知り合いにこの島民の出身者がおり、「是非、家に来て欲しい」との誘いいただいたので訪問することができました。

この続きは次回に。

終わりに

ザンジバル島では年中、海が格好の遊び場。走りながら飛び込む子供、後ろ宙返りしながら飛び込む子、いろんな子が海に飛び込むことを“遊び”にしています。

なんだかルールもなく、自分のやりたいように飛び込む姿はとても印象的で絵になりますね。

島内を案内されていると「これ食べて!!」と現地人からもらったアサリを蒸したもの。

↓↓

